

静岡市立芹沢銈介美術館所蔵の魚皮衣について

梶原 洋

Fish skin garment: Serizawa Keisuke Art Museum, Shizuoka, Japan

KAJIWARA Hiroshi

キーワード : 魚皮衣 ハレの衣装 吉祥文 朱彩点状文

要旨

魚皮は、かつてユーラシア大陸全域の諸民族にとって生活に欠かせない材料であった。静岡市立芹沢銈介美術館所蔵の本魚皮衣はこれまですでに芹沢長介先生により紹介されているが、本論考では、主にアメリカ自然史博物館のラウファー資料との比較を元に、新たに背面文様の分類し解釈加えた。その結果、全体の文様構造は男女を表す吉祥文を図案化した晴着であること、はじめは魚皮の穴を塞ぐための単純な文様展開であったものが次第に複雑化したことなどを明らかにした。さらにこれまで注目されてこなかった左右対称に配置される「朱彩点状文」の存在を見出し、渦巻文だけに限られない文様構造も明らかにすることができた。本資料は、世界的な水準から見ても最も優れた魚皮衣の一つであることが確認できた。

Abstract

The fish skin garment at the Serizawa Keisuke Art Museum in Shizuoka, Japan (Plate1) was acquired by late Professor Chosuke Serizawa around 1953. The garment was likely first discovered and purchased at a Nivkh village in Sakhalin (Karafuto in Japanese) by Professor Shuzo Ishida in 1914 during his expeditions there. Tanned fish skins (mostly *Salmonidae*) were light, water-resistant materials widely exploited for daily use among natives in Eurasia (fig. 2, 4, 5). Especially the Nanai (previously called "Gold") living along the Amur and its tributaries were famed for their excellent fish skin garments with skilful embroidery and splendid back appliques, and were known as the "fish skin Tartars" in China (fig.1).

As a native folk art, fish skin garments were first described in detail by Berthold Laufer, a member of the Jesup North Pacific Expedition of the American Museum of Natural History led by the famous anthropologist F. Boas. Laufer's ethnographic monograph of 1902, "The Decorative Art of the Amur Tribe," provided excellent illustrations and explanations of fish skin garments in these regions. Comparing the garment from the Serizawa collection with those of Laufer (1902), Ivanov (1963), Okladnikov (1964, 1981), Smolyak (1984), Kocheshkov (1995), and so on, I have tried to ascertain the historical, ethnological and artistic significance of the Serizawa garment among the indigenous cultures of the Amur, Sakhalin and Hokkaido, and have made these principal observations:

1. The general style of the garment is very similar to those worn by noble women of the Qing dynasty in China (fig. 10). Fish skin garments were produced as wedding costumes presented to daughters by their mothers. The bell-like metal ornaments hanging along the hem functioned as lucky weights, preventing disturbance by winds and evils (fig. 7, 8).
2. Within the complex spiral patterns on these garments, Laufer recognized and placed importance on animal motifs-fowl, dragons, fish, and deer-as individual symbols borrowed from Chinese culture. I, however, would place more emphasis on the whole complex of spirals and animal motifs as a kind of lucky omen (fig. 9, 11).
3. With regard to the designs on these fish-skin garments, four types have been discerned (fig. 12-15). The Serizawa garment is classified as type B.
4. As to the chronological placement of fish skin garments, those with simpler appliques appear to be much older, as on the most archaic samples, appliques appear to have simply been designed to close holes made in the removal of fins (fig. 3).
5. In the process of examining the Serizawa garment, I was able to shed light on the small, red colored dots symmetrically

arranged on both faces of the garment (Plate2). These dots have rarely been noted by previous researchers.

6. The side-hanging decorations imitate ancient ceremonial ornaments found on robes for noble women in China (fig. 16).
7. The Serizawa garment, with its splendid appliques, is confirmed as one of the most excellently designed existing specimens produced by highly skilled Nanai women, possibly in the mid-19th century.

1 はじめに

静岡市立芹沢銈介美術館所蔵の魚皮衣は、芹沢長介先生が昭和28年頃、神田の古書店で見つけ、購入したものである（芹沢 1990、60-62）。そのいきさつを先生は、次のように書いている。「樺太から将来されたというシャーマンの魚皮衣があった。背中や裾には鈴のような金具がいちめんに吊りさげられていた。数日後にまた書店をのぞいてみると、その魚皮衣はすでになく、誰かが買っていったということであった。更に約一ヶ月ほどたってから、その魚皮衣が再び山岡書店へ戻ってきた。どういういきさつから知らないが、いちめんにつり下げられていた金具は全部とり外され、以前にはわからなかったその下の切伏文様やうろこの跡などがよく見えるようになっていた」（芹沢 1990：60）。この魚皮衣は、明治四十年（1907年）から坪井正五郎、金田一京助らと樺太の調査（石田 1908）を開始した秋田出身の人類学者、石田収蔵が大正3（1914）年頃、ニブフから譲り受けた資料である可能性も考えられる（芹沢 前掲、板橋区立郷土資料館 2000）¹。先生は、この膝まで届く魚皮衣（以下衣服の形態としてはハラートと記述する）について、ノボシビルスクの考古学、民族学研究所博物館所蔵の魚皮衣やオクラードニコフの考察（Okladnikov 1974、1981）を参照して、北東アジアの民族芸術として高く評価し、その構造も含めて考察を加えており、基本的なデータについては十分に明らかである。この小論では、主にラウファー 1902の資料と比較しながら、魚皮衣の歴史的・文化的背景を含めて若干の追加的考察を行いたいと考え、あえて筆をとったしだいである。今回の小論をまとめるにあたり、観察の結果を総合する形で図を作成した（口絵1）。

2 魚皮衣と文様の研究史

a. 魚皮衣について

魚皮の用途は広く、防水性の高い普段着として広く用いられたばかりでなく、テントの覆い、窓（ガラスの代わりⁱⁱ）、帽子、帯、手袋、カバン、火口入れ、楽器（儀式用団扇太鼓）、人形、さまざまな紐などの素材としても用いられた。また、ソ連時代は、「貧乏人の皮」とも呼ばれ、下級兵士のコートに多く使われていた。現代でも、容器の飾り、財布ⁱⁱⁱ、壁掛け、電話カ

バー、ネックレス、イヤリング、釣り用の手袋^{iv}、などに加工されており、ディオールによりスリッパも作られている。

民族誌の魚皮衣については、間宮（1856）、鳥居（1926）、加藤（1986）、芹沢（1990）、大塚（1993、2003）、シュレンク（1899）、ラウファー（1902）、イワノフ（1963）、レーヴィンとポタポーフ（1964）、オクラードニコフ（1974、1981）、スマリヤーク（1984、1994、2001）、コチェシュコフ（1989、1995）、イワシェンコなど1995、トゥラーエフなど2001、2008、グレボワ（2010）、於と黄（2002）、宋と高他編（2004）、張と王（2008）らによる紹介、分析、製作法、文様分析などの研究がある。魚皮衣を製作あるいは利用した民族は、ユーラシアの各地に点在している。北欧のバイキング、西シベリアのオビ川流域とその周辺のハント族とマンシ族、ヨーロッパのツンドラ地帯に住むネネツ族、アムール中流域、更にその支流のスガリを中心に住む少数民族としてナナイ族、もしくは中国でいうホジェン族（赫哲族 Hezhezu）、アムール下流のネギダル族、ニブヒ族、ウデヘ族、ウリチ（ナニ）族、オロチ族、サハリンのオロチョン族などがあげられる。そしてサハリンと北海道のアイヌ民族の間でも魚皮が重要な生活資源であったことはよく知られている（犬飼1955、更科、更科1976、Fitzhugh, W. W., Dubreuil, C.O. eds., 1999）。なかでもナナイ族は、かつてゴリドあるいはゴルディとも呼ばれ、中国では、魚皮韃子（yu pi da zi）とも蔑称されていたが、魚皮を広範に利用する民族として特に著名であった（宋、高 2004）。素材の魚皮は、シロザケ、ベニザケ、マンシュウマス、アムールナマズ、コイ、カワメンタイ、チョーザメ、アムールカワカマス（Grebova 2010）、ワイヘットナマズ、哲羅サケ、タイメン（イトウ）（Yu and Huang 2002、Song et al. 宋と高他編2004：16-17）などが使われた。

この地域の民族が魚皮を生活に広く利用していることについては、古くから知られていた。清の乾隆十六年（1751年）に編纂、出版された『皇清職貢圖』には、赫哲族について「女（の衣服）は魚皮を多く用い、緑は色布で飾り裾には銅の鈴をつけ、鎧^vに似る」と説明がある。図には右衽で前身頃の端と裾に縞模様があり金属の飾りを下げた衣服を着た女性が、斧状の道具を使用して魚皮をなめす姿（図1右）と金属製の飾り

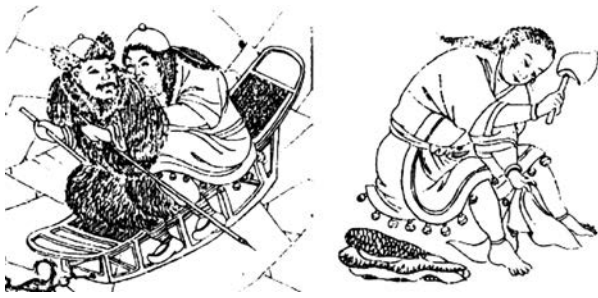


図1 赫哲族の図
左、犬橇に乗る男女、右、女子による魚皮なめしの様子
(伝1715『皇清職貢圖より』)
Fig.1 Hezhezu tribe. Left: A couple on a dog sledge, Right:
Tanning fish skins
From Zhuan1715 "Huang qing zhi gong tu"

を裾につけた魚皮衣を着た女性が犬橇に乗った姿が描かれている(図1左)(Zhuan et.al. 2008:38)。鳥居龍蔵もこの『皇清職貢圖』を取り上げて、アムール流域に住む奇楞(Chileng)、琿春付近の恰喀拉(Qiakala)また、赫哲(Hezhe)をナナイ族に比定し、人々が魚皮もしくは鹿皮をもって衣服とし、縁を色布で飾り、銅鈴で裾を綴っていると紹介した(鳥居1926:38-39)。

間宮林蔵が1809年、樺太からアムール川流域を調査した報告である『北蝦夷分界余話』(1811)や『北蝦夷図説』(1856)では、19世紀初頭の樺太アイヌ、オロッコ(ウィルタ)やその北部のスメンクル(ニブヒ)の人々が魚皮衣をまとい、また、重要な生活資料として魚皮が貯蔵され、窓枠、家の覆いなどにも用いられていることが記録されている(間宮1811、1856、1979ほか)。ただ、それに描かれた魚皮衣は、今回の資料に類似した清朝の女子衣服である右衽の襦衣や髻衣に近い形態の衣服ではなく前中央でボタン止めの衣服として描かれている(図2)^{vi}。一方18世紀半ばの『皇清職貢圖』(1751)の赫哲族の女夷の衣服は、清朝式の衣服である。これはオロッコ、スメンクル(ニブヒ)の服飾がロシアの影響を受けていたのに対して、赫哲族(ナナイ)の場合は、より強く清朝の影響を受けていることを示しているとも考えられる。



図2 スメンクル女夷
(九州大学蔵『北蝦夷分界余話』より)、
Fig.2 Smenkr woman
"Kitaezo Bunkai Yawa"
Kyushu University,
Digital Archive"

文政6年(1823)に、村上貞介(秦檣丸)が、義父・村上嶋之允の未完の画帳を完成させた『蝦夷生計図説』では、樺太アイヌの女性が魚皮衣を身に着けていたことが記されている(村上、秦、間宮1990)。

コリンズは1856-57年に、アメリカ人として最初にアムール流域に入りゴルディ(現在のナナイ)の記録を残した。その旅行記に「先住民は、魚皮で作った服を着る。ある女性で作った服は、丈夫で漁労の季節に適している。中略 この服は、軽くまたしなやかである。中略 若い女性は、貝殻やビーズ、小さな飾りで裾を縁取った、新しくて輝くような長い魚皮衣をまとい、自然のままの岸辺で笑いざざめいている」(Collins 1962:257-258)また「かれらの女性は魚皮のチュニックを着るが、そのスカートの裾のあたりには、一列に真鍮もしくは小さな海棲の貝殻がつけられた」(Collins 前掲:263)と飾りの付いた魚皮衣の記述がある。さらに住居内部の描写に「家の三方は高くなっていて、座席としても家財の置き場としても十分である。空いたところには炉が据えられ、調理具、さまざまな魚や魚のワタが置かれ、使うための魚皮が乾かされていた」(Collins 前掲:275)とあり、魚皮が日常のさまざまな場面で生活必需品として利用されていた様子を知ることができる。

アメリカ自然史博物館のラウファー(Berthold Laufer)は、ジェサップ(Morris K. Jesup)の資金援助による北太平洋調査隊(1897-1902)の一員として、アムール下流域、サハリンの地域の少数民族の調査(1898-1899)に参加した(ローン2009、American Museum of Natural History 2013)。ジェサップ調査隊は、F. ボアズの指揮のもと、ラウファー、ヨヒエルソン、ボゴラスらが、チュコトカ半島、ヤクート、サハリン、アムールなどの民族学的調査を精力的に実施した。この調査の報告の一つとしてラウファーは、ゴールド(ナナイ)、ギリヤーク(ニブヒ)、アイヌの独自の文様と民族芸術文化について『アムール河諸族の装飾芸術』というモノグラフを発表した(Laufer 1902)。魚皮衣については、背面に文様群をもつ女性の衣服10点を取り上げる中で、その文様構成を詳しく分析した(Laufer 1902:61-79)。文様の要素としてとくにニワトリ、サカナ、トナカイを中心に記述している。ラウファーの観察によれば、魚皮衣は三層からなり、①基盤となる魚皮をつづり合わせた白色の長着(ハラート)、②アップリケの基盤となる楕円形の皮、その上の③魚皮によるアップリケ文様である。中層のアップリケの基板は、アップリケそのものよりもやや大きく切り取られた皮で、薄い赤色もしくは青色で彩色され、その上に縫いつけられるアップリケを引き立たせる役割をする。最上層の色糸で縫い付けられたアップ

リケは青色で彩色されている (Laufer 1902:67)。さらにラウファーは、背面が上下2～3段の文様帯からなることに着目してそれぞれの段ごとに描写している (laufer 1902:68)。

イワノフの『歴史資料としてのシベリア諸民族の文様』“Орнамент народов Сибири как исторический источник”1963は、シベリア全域の諸民族の文様文化について、歴史、技術、分類などの観点から網羅、分析したもので、今でもその価値を失わない。そのなかで、魚皮衣の裁ち方、文様の付けられる場所などの属性から、北中国、モンゴル、サヤン・アルタイの諸民族の衣服との類似を指摘した (Ivanov 1963:414 fig.286-1)。4点の魚皮衣が図示されており、ミッデンドルフ1869所載のネギダル族のハラートNo.1は、珍しく左衽である。裾には金属製の飾りが付属する。19世紀前半にはこの形式の衣服はまだ左衽であった可能性がある。イワノフによれば、魚皮は、なめされる過程でヒレの部分に穴が開くため、衣服として縫製するときには魚皮の小裂で埋めなくてはならない。後には、その小裂を彩色して意図的に文様とした (図3-a) が、この技法は、さらにアップリケとして発達した。さらに、おそらくは、中国の吉祥文に由来するシンプルな図形を貼り付けたの (図3-b) が、そのもつとも初期的な形式と推定される (Ivanov 1963:416)。また、この文様を手書する手法も存在した (Ivanov 1963:417 fig.287)。

スマリヤーク『アムール河下流域とサハリン諸民族の伝統的生業と物質文化』1984によれば、背中一面に切伏模様が配置された魚皮衣は、ナナイ族では、特に結婚式用の晴れ着として、母が娘のために自分の持参金から作ったものだという。アムール下流域ではボソマ・アミリ (Bosoma Amiri, ウリチ族で Busuma Amiri) と呼ばれ、文字通り魚皮衣を意味する。

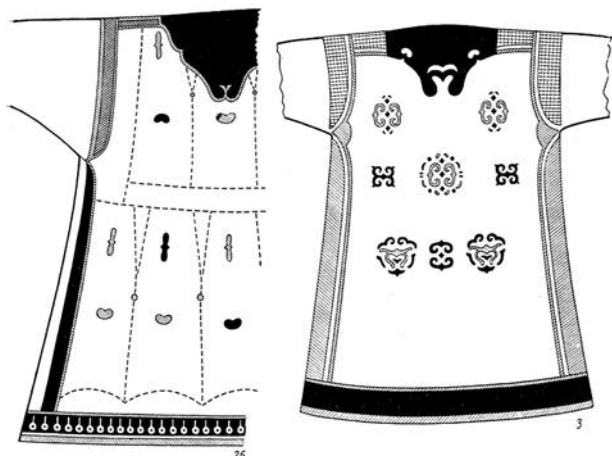


図3 a、b オロチ族の魚皮衣
Fig.3 Fish skin garments, Orochi tribe.
(Ivanov 1963: 416 fig.286-2,3)

上流域ではシケ (Sike) と呼ばれていた (Смоляк Smolyak 1984:163)。

アムール下流域とサハリンの諸民族の文様について研究したコチェシュコフは、魚皮の種類とその利用法との関係について紹介した。ナナイ族ではサケの皮 (dabahsa) は、ハラート (長衣)、膝当て、靴の素材となった。草魚の皮 (kurahsa) は、ハラートや膝当て (脛巾) に使われた。カワカマスの皮 (gachahsa) は、靴に使われ、ナマズの皮 (lahsa) は、ハラートに使われた。タイメン (イトウ) の皮 (delihsa) とリンカ (*Brachymystax lenok* コクチマス?、中国の細鱗魚か) の皮 (nimahsa) は、靴に使われた。かつては、糸も魚皮から作られていたという (Кочешков, Kocheshkov 1995:17)。

ウデヘ族を調査したズヴィデナヤとノビコワは、魚皮は、生活にとって欠かせない材料で特に水を通さないという特性を利用した漁労用の衣服や靴として、ウデヘ、ナナイ、オロチなどの人々に広く利用されてきたことを指摘している (Звиденная и Новикова, Zvidennaya and Nvikova 2010)。

橋本は、魚皮衣について①満州服、モンゴル服に類似したもの②アイヌ型とに分類し、満州服に類似したもの以前にエベンキの衣服に類似した形態があった可能性を指摘している (橋本 1995、2005:136)。また、文様については、「固有に発達したもの、あるいは中国からの影響のあるものという混合した形」とであると理解している (橋本 2005:136、137)。

魚皮衣の製作技法、特に魚皮のなめし方については、近年何人かの研究者により相次いでまとめられている。中国の張と王は、赫哲族の魚皮製作について①製作技法、②魚皮による製品、③現状、④歴史などについて詳しく紹介した (張、王 2005)。大塚は、主に魚皮衣の製作技術について現代のウリチの事例について詳しく紹介している (大塚 2003)。五十嵐は、赫哲とナナイの魚皮衣について、主に赫哲の資料から製作技法、文様などについて考察を加えた (五十嵐 2009)。グレボワは、アムール川下流域の諸民族の魚皮製作とその利用について、歴史、現代の民族との関連などについても紹介しているが、特にアムール流域の魚皮製作法について詳しい (Grebova 2010)。

この地域の交易を分析した佐々木は、ニブフがこの交易の中心であり、その活動範囲が、北はオホーツク沿岸、サハリン、南は松花江の三姓似まで及んでおり、それにより富を蓄積したことを指摘している (佐々木 1996:46)。また、シュレンクの報告の交易品目をまとめた表によれば、女性用の魚皮衣が1yaつまり清朝の1両で取引されていた (佐々木 1996:217)。芹沢資料が石田により樺太で購入されたこと

は当然のことだった。

b. 文様とその構成について

これまででも、この地域の文様については、多くの研究者により分析がなされてきた。

この中でラスファアーは、アムール諸族の文様要素は、中国からもたらされたものがその基盤にあり、その強い影響のもとに成り立っているが^{vi}、独自に発展した東アジア芸術の一つとして成立していると考えられている (Laufer 1902, p.2, 4)。そして、文様の要素を①帯状文、②渦巻文、③ニワトリ文、④魚文、⑤龍文、⑥シカ文、⑦部分的動物文、⑧花葉文の6種類に分類し、さらにそれぞれの文様の組み合わせについて考察を加えた。これらの文様には、アムール河周辺諸民族の生活に密接に関連する動物であるクマ、クロテン、カワウソ、チョウザメ、サケなどは欠落しており、一方で中国の神話的な動物である蝶、コウモリ、龍、鳳凰、カメ、クモ、トカゲ、蛇、カエルなどが借用されていること<さらに卍文、巴紋が使われていることをラウファアーは指摘し (Laufer 1900, 300)、中国あるいは日本文化からの強い影響があった根拠と考えたのである。魚皮衣の文様構成については、中心的なモチーフとしニワトリを重視し、魚をそれに付随するモチーフとして記述している。この解釈の基礎には、Steinen のニワトリ、卍、三つ巴などについてのシンボル解釈があり、観念論的である (Laufer 1900: 301-302)。しかも、明瞭なものを除き、文様の一部だけにスポットを当ててニワトリや魚に比定する説明は、今日から見るとかなり強引で解釈し過ぎの感を免れない^{vii}。

一方、ラウファアーの中国文化影響説に対し、ロシアの研究者は、先史時代からの文様の連続性を主張し、地域の自立的な文様文化である点により力点を置いて解釈を加えている。

シュレンクは、1854-56年にかけてのアムール・サハリン地域の調査モノグラフの中で、ギリヤーク (ニブフ) 族においては、中国と日本からの文様上の影響を指摘した上で、中国に近い民族より芸術的に高度である報告した (Shrenck 1899: 90-91)。

イワノフはこの地域の文様を、木や骨、金属、布や皮革などの素材との関連で分けたうえで、①平行線文、②渦巻紐文 (鎖状文を含む、モレウ文に類似のもの)、③幾何文 (十字、メアンダー文、アイウシ文)、④動物文、⑤雲形文、⑥植物文に分類した (Ivanov 1963: 344, 381)。

オクラードニコフは、文様においてもラウファアーが結論づけた中国から周縁部への文化の拡散という考え方を批判して、「古来の伝統を頑固に保持し」ており、「アムール河下流

域では、独自の芸術創造が長く持続された」と主張した (オクラードニコフ 1974: 111, Okladnikov 1981)。彼は、土器や岩壁画の分析から、古代と現代とに共通する文様として①アムール網目文、②鱗文、③サルに似た渦巻文、④トナカイ、⑤水鳥、⑥龍もしくは蛇、⑦銅銭類似文、⑧メアンダー文、⑨カッコ文^{ix}をあげている (オクラードニコフ 1974: 111-144)。オクラードニコフは、ラウファアーが挙げた文様要素の中で、ニワトリ、コウモリ、魚については、清代に借用された可能性を認めたが、鳥文についてオクラードニコフは、古代からの伝統につらなるものであって、ラウファアーのいうニワトリではなく水鳥であると推定した。また、いわゆる唐草文のような植物的文様要素についても、中世にこの地域にもたらされたものであるが、古代からの渦巻文の伝統と結びつけたのだとも指摘した (オクラードニコフ 1974: 134-135)。

コチェシュコフもイワノフやオクラードニコフと同様にこの地域の文様が先史時代から続く固有の文化であること、各民族によりそれぞれ違いがあることを強調した (Kocheshkov 1995: 4-10)。

大塚は、主にアイヌの文様を考察する中で、モレウ文とアイウシ文という2つの文様がアイヌ文様の貴重をなすものであり、アムール河流域とサハリンの民族との交流の中で培われてきたものであることを述べた (大塚 1993)。

ロシアの研究者に多い先史時代からの文様の継続を認め、古くからの独立的な民族文化の存在した証拠とする考え方については、特に、古代から中世の時期における文様の連続性を示す証拠が極めて少なく、十分に証明することができないことを指摘しておきたい。特に今後の衣服などの有機物の発見に待たなくてはならない。

3 魚皮のなめし方

現代の魚皮なめし手順は、1 魚皮の剥ぎ取り、2 皮の清掃、3 皮の乾燥、4 皮のなめし加工に分けられる (張、王 2005、大塚 2003、主に Grebova 2010 参照)。

①生魚もしくは冷凍魚を数時間、屋外で乾燥させ、皮を剥がす。塩漬けの魚も可能だが、後に剥がした皮を水に浸して柔らかくしなければならない。

②鋭いナイフで頭の基部に切れ目を入れ、魚の腹に沿って尾ビレまで割く。

③魚の内蔵を取って、エラを切り捨てる。

④頭の回りに丁寧に切り込みを入れ、尾ビレと胸ビレを切り取る。

⑤皮を傷つけないために鹿の中手骨で作った骨製ナイフ (ナ

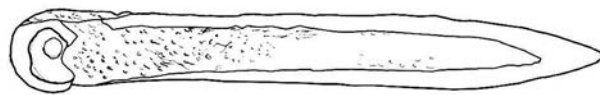


図4 魚皮剥ぎ取り用骨製ナイフ (ソグボコ)
Fig.4 Bone knife for skinning fish (Sogboko)



図5 魚皮の剥ぎ取り。1988年筆者撮影
(ハバロフスク地方 サカチ・アリヤン村ガーシャ遺跡)
Fig. 5 Skinning fish at Gasha, Sakachi Alyan village, Khabalovsk region, 1988.
Photo by Kajiwara.

ナイ語でソグボコ)^x (図4)を用い、指も使いながら、首の切り込みから尻尾に向けて皮を破らないように剥がす (図5)^x、魚をひっくり返して、同じ作業を行う。かつては時に、木製のナイフも使われた。最も難しいのは薄く柔らかい腹部の剥ぎ取りである。力を入れながら皮を尾ビレの方向に剥ぐ。

⑥鋭い金属のナイフで皮の内面から残りの肉と脂肪を削り取る。よく除去しないと匂いが残る。脂肪をとるには、腐った切り株を包んで揉む方法、よもぎ、ブルーグラスなどを皮で包んで置く方法、水で洗うときに木の灰を混ぜる方法など様々だった。背ビレの部分を特に丁寧に作業するが、ヒレは取らず、皮が乾いてから切り取る。その結果、皮の真ん中に穴が空くが、完成品では、アプリケで塞がれる。魚が大きかった場合、2枚の皮に切り分けられる。

⑦肉と脂肪を落とした皮を水で洗う。きれいな水に洗剤を足して、もう一度皮をよく洗う。皮なめし用の溶液は、水に塩、酢、重曹を少し入れる。脂肪を落とし、臭いをなくすために、皮を溶液に漬け、数時間おく^{vi}。

⑧きれいになった皮を滑らかな板に貼り (伸ばしたりしない)、完全に乾くまでそのままにする。数日経過すると、皮は乾燥して堅くなる。

⑨皮もみ用の器具 (デレー)などで、ビロード状になるまで柔らかくする。魚皮を丸めて、ギザギザの歯を持つハンドルで皮を揉む。均等に揉むために皮の位置を頻繁に変える。かつては、『皇清職貢圖』に見られるように木製の斧状槌 (クングク)と真ん中の凹んだ木の台 (ハイルガ)を利用していたことが知られている。また、木製槌の代わりにナマクラの刃を持つ斧 (パーティー)も使われた (図1右)。

⑩器具を使用しても、まだかさかさ音がする場合は、さらに手で丁寧に揉む。

⑪残った鱗をナイフで剥がすには腹から背中に向けて作業をする。それでもまだ鱗の跡が残る。この作業では刃の短いナイフが適切である。

⑫皮の表に残った繊維を軽石でこそげ取る。皮を完全に滑らかにするためにウロコの跡も取り除く。そのために表面を軽石で加工し、その後細かいサンドペーパー、又は刃物やガラスの破片でこする。皮が特に堅い場合、裏の余計な繊維を錐の先で取る。錐先を10個重ねて皮の表面を滑らかにする。一般のヤスリも使用可能。

4 芹沢銈介美術館の魚皮衣 (口絵1)

魚皮衣は、筒袖、右衽で、大きさは、935 (前面) × 1310 (袖口から袖口まで) mm である。芹沢によれば、上半部に18尾、下半部に27尾、袖に12尾、裾まわりに17尾、その他の端切れが50片用いられている。サハリンではかつて、間宮海峡をまたいで山丹交易と称される交易が盛んに行われていたことが知られている (佐々木 1998など)。そこではさまざまなモノが大陸から流れ込んでいた。芹沢も指摘しているように (芹沢 1990: 61)、アムール河流域のナナイ族が魚皮衣の製作に長けていることは、早くから著名であり (Smolyak 1984: 159)、この魚皮衣も、山丹交易を通してサハリンのニブヒ族までもたらされたと考えるのが妥当であろう^{xii}。

この資料は、まず、魚皮を素材とした衣服 (tunic、khalat、ハラート) が縫製され、この生地の上に、朱、群青 (もしくは黒)、黄色の三色からなる染色襟周りや袖口、裾などに施され、

さらに切伏せ（アップリケ）による文様が配置されて、華やかに彩られていたものであろう。細かく見ていくと、袖口には、二本の朱と群青の太い縞と黄と朱の細い縞が施されていたものと思われる。また、前面では、衿とそれに連続する左前身頃上部（衿先）、両肩の長方形の肩章状の部分に、群青の皮を基盤としネガティブな渦巻文が切伏せ（アップリケ）されている。この左前身頃上部の渦巻文の縁には、朱でカッコ文（アイウシ文）が描かれている。スマリヤークによれば、19世紀以前には、文様は左前身頃上部に限られて施されたとされているので、この資料もそれ以前のものであろう（Smolyak 1984:157）。さら左前身頃の下半部の縁と裾には、朱、群青、黄の太い帯が三本、群青と朱の細い線が二本付けられていたものであろう。背面上部の首周りとは、後身頃両側は、スマリヤークの記述のように、朱や黄の細い帯で縁取られ、背面全体には、鳥（水鳥もしくは鳳凰）文、鳳凰（龍）文^{xv}、魚文、トナカイ（シカ）文、竜頭文やさまざまな渦巻文で構成された切伏（アップリケ）が対称に配置されている。裾には前面と同様朱、群青もしくは黒、黄の太い帯が施されていたと考えられる（口絵1）（芹沢 1990:60-61）。さまざまな切伏文様は基盤となる一枚の皮の上^{xvi}に切伏文と同色の群青色の細かい糸により縫い付けられ、さらに、それ全体が魚皮の生地の上に貼り付けられている。切伏の基盤となるパッチは、残された色彩から本来薄い赤^{xvii}に、切伏文そのものは青色もしくは群青色に塗彩されていたものと思われ、この事実はいくつかの類例からも裏付けられる。例えば19世紀初頭の間宮林蔵による樺太アイヌの「絹衣」では、背文様の切伏の基盤は、赤色に塗彩されていたし（図6）、ラウファーにより収集された魚皮衣の記述には、切伏せの基板の楕円形の皮は、上の切伏せを引き立たせるために薄い赤もしくは青で染められていたとの観察がある（Laufer 1902:67）。また、スマリヤークの記述とも合致する（Smolyak 1984:167-168）。衿の周囲は、黒と茶の縞のピロードにより縁取りされている。魚皮衣は右真横でボタン留めされ、背面の後身頃下半部両側には、スぺード形の文様部から垂下する帯状の渦巻文が見られる。この両側の垂下帯は、ラウファーのやスマリヤークの図にもあるように、本来、前身頃と背面の両面に半分ずつ見えるのだが、芹沢コレクションの前合わせが開きずのため背面にずれて全体が見えるようになっている。

芹沢によれば、本来この魚皮衣の背面には、一面に金具が吊り下げられていたようだが^{xviii}。一方、石田所蔵の魚皮衣の写真には、裾だけに金具が取り付けられているように見られる（板橋区立郷土資料館2000:35, fig.1a, 1b）。金具が全面ではなくその一部であるということから、両者は同一ではない

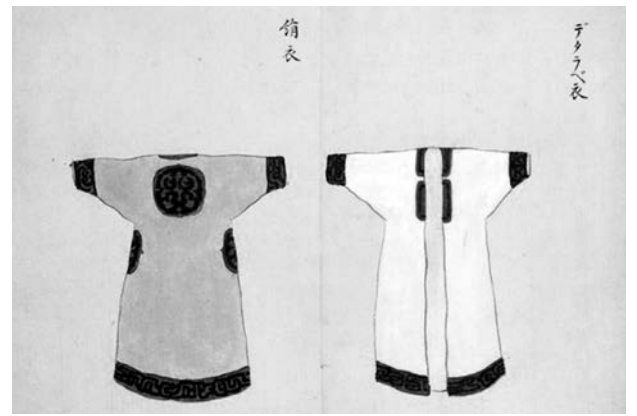


図6 樺太アイヌ女子の服装
『北蝦夷分界余話』、九州大学デジタルアーカイブより
Fig. 6 Women's garments of Karafuto Ainu, "Kitaezo Bunkai Yowa, Kyushu University Digital Archive.

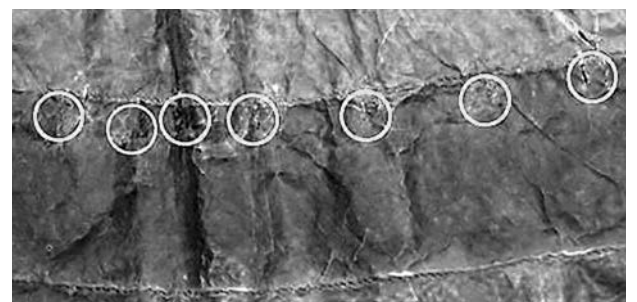


図7 裾に見られる金具取り付け痕と見られる穴
Fig.7 Pinholes for hanging metal decorations at lower fringe of the fish skin garment.

との考えもあるが^{xix}、文様要素とその配置から見て、やはり同一のものではあるまいか。芹沢資料をよく観察すると、裾から二段目の群青の帯には、ほぼ等間隔にかすかな穴が見られ（図7）、金属の下げ飾りをつけた場所である可能性が指摘できる。スマリヤークは、この金属製の裾飾り（achian）について、魚皮衣の「裾には、二本から三段の異なった色の幅広の布の帯が付けられている。最下段の縁飾りは、明るい色で、上部は主に黒である。二段目（下から）もしくは三段目には、装飾として一列の、例えば貝ボタン（kaupi）

か金属製の下げ飾りが縫い付けられている。それによって裾に重さを加えるという役割があり、風の強い時に役立つ」という実用的な用途があることを明らかにしたが（Smolyak 1984:156）、悪霊から女性を守る護符という説明もされて



図8 オロチ族衣服の下げ飾り
Fig.8 Hanged metal decorations of Orochi tribe.
Gluzovskii 1917:137

いる (Derevianko ed. 2005: 162)。ウデヘ族の習慣では裾に一行。ナナイ族では二列であった (Smolyak 1984: 157、Gluzovskii 1917) (図8)。

背面全体の文様は、左右対称であり、おおまかに上中下の三段に分けることができる (図9)。芹沢銈介美術館所蔵の魚皮衣の背面に展開される文様は①鳥^a、②龍^{b、d}、③鳳凰^g (劉、趙 1999)、④魚^{a、c、e}、⑤シカ (トナカイ) ^eなどの動物文、⑥渦巻複合文、⑦かっこ (アイウシ) 文に分けることができる。後述するように、他の資料では、横に伸びる曲線により、2段から4段にわけられており、垂直方向は、中心軸に対して左右対称に展開する。多くの場合、中心には、最も複雑で華麗な文様が貼り付けられている。

芹沢資料の場合、中心となる文様は^gであり、上下の渦巻文とその左右に相対する鳳凰 (龍?) によって中央部に大きな菱型の文様部を作り出している。さらに、この中心文様の上には^aの鳥 (鳳凰) が^bに乗る。この鳥については、Laufer はニワトリとオクラードニコフらは水鳥と解釈しているが、最も大きな影響を与えたであろう清朝の衣服では、大部分が鳳凰である。^bは、中心文様^gを挟んで上下線対称的に位置する^dと裏返しの文様となっている。^bと^dの間には^cが6個配置され、その下部には^eが3個、^fが^dから下垂して2個左右対称に配置されている。^Eの上部は、^fを180度回転したものと同じと考えられる。この模様を展開を見ると中心に対して左右対称に位置する^{a、b、c、g、f}と上下対照に水平方向に配置される^{c、e}の文様に分かれていること、文様には、回転すると同じ文様になるものが存在することが見て取れる。体側の文様帯④は、その下の渦巻文の描かれた長い帯とともに古代から遊牧民により使用された垂下する腰佩もしくは佩綬を思わせるものである。さらに、これまでほとんど気づかれていなかった文様を見出すことができた。それは、前面の衿と左前身頃上部、肩、背面の衿回り、肩、体側に施された渦巻文の中や側に、左右対称に施された朱色の点で、群青色の文様帯中で一段と鮮やかに映えている。これも文様の一部とかがえられよう (口絵2)。点状の朱彩文様施文の類例を調べた限りでは、ナナイ族の脚絆の魚皮製切伏見られる唐草文に添えられた例 (Laufer 1902, p.13, plate III-2) やオロチ族の白樺製バ

ケット底部の曲線文に添えられた例 (Kocheshkov 1995: 88, 図3-1) などを見つけることができた。これが単なる装飾なのかそれ以上の象徴的な意味を持つものなのかについては、今後の研究を待たなくてはならない。正面首周り右側と背面右側体側上部 (本来全面の右側面に位置する) には、ボタン掛けの草紐があり、同様に朱で彩られている。

この魚皮衣の全体的の形状については、他の研究者も指摘しているが、モンゴルや清朝の女性の衣服との類似性を指摘しておかなくてはならない。もとよりナナイ族も清朝に朝貢していた民族であり清の支配下に置かれていたばかりでなく、清朝の支配民族である満州族 (かつては女真族) の故地に居住しており、本来的に両者は共通の文化を保持していたであろう。強い政治的文化的影響下にあったことは言うまでも

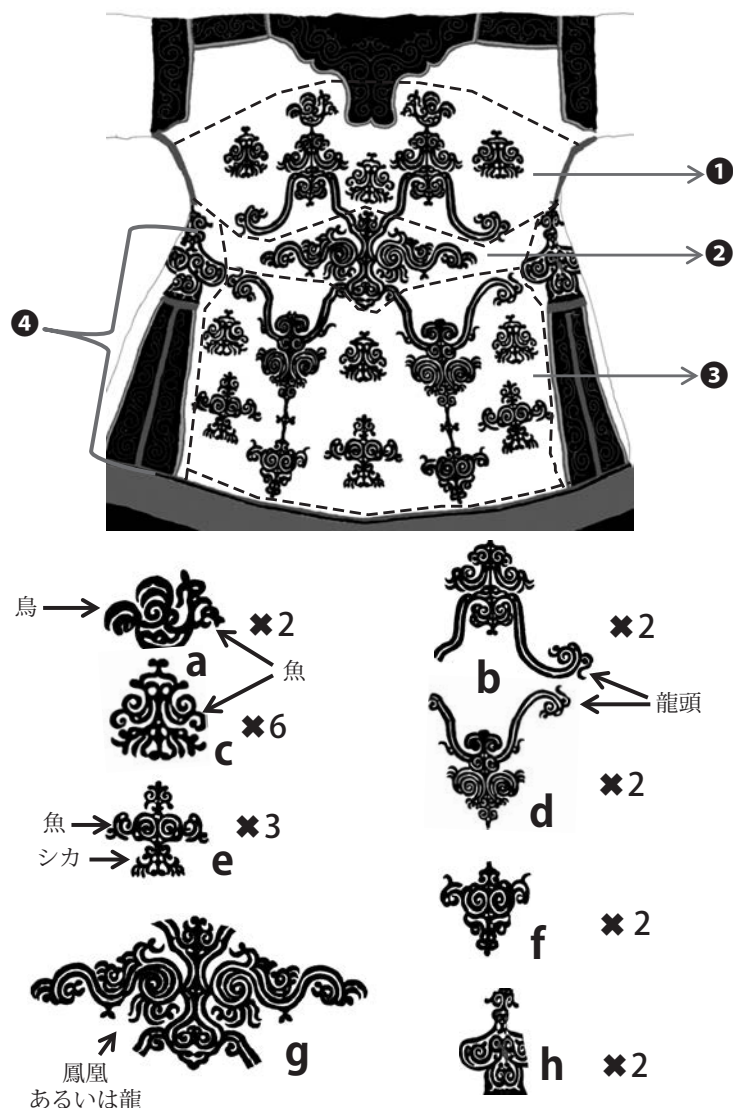


図9 芹沢資料魚皮衣の背面文様構成と単位文様
①上部文様部、②中心文様部、③下部文様部、④側面佩綬様文様帯
Fig.9 Arrangements of decoration appliques and motifs.
① Upper decorations ② Center decorations
③ Lower decorations ④ Side decorations

ない(例えば間宮林蔵の東鞆紀行)。例えば丸首で袖の端に二〜三本の縞帯をもつ襖衣や髷衣は、袖の幅はより広く短いものの右衽で丸首のへりから右合わせの縁までの裁ち方は全く同一である。さらに両脇のスリットを縁取る装飾として雲形文様とそれから垂下する文様帯と下端の文様帯の様相や配置も魚皮衣のそれときわめて酷似する^{xx}(図10、a、b)。このような事例を分析すれば、魚皮衣の形態がまず、第一に清朝の女子衣服を模倣もしくはその影響を強く受けたものであることは一見して納得できよう。文様から見ても、清朝の女子服には鳳凰、蝶、福を表すコウモリ、まれには龍などの動物や牡丹などの花、喜や寿の文字を文様化したものなどが華麗にあしらわれている。これらが魚皮衣の文様にも強い影響を与えた可能性が高い(沈 1988、周、高 1988、Vollmer 2002、王、周 2008、李、山村 2009)。



図10 清代貴族女性衣装

a. 皇后常服、周・高1988:180-fig.304

b. 紫色暗紋網大鑲辺女髷衣、王・周2008 p.80

Fig.10 Noblewomen's garments of Qing dynasty.

a. Informal garment for queen. Wang and Gao 1988.

b. Dark purple garment. Wang and Zhou 2008.

5 魚皮衣の文様と分類

a. 文様

魚皮衣の文様を検討すると、ラウファーやロシアの研究者が言うような鳥、魚、シカなどの文様も認められるが、他に多様な渦巻き、曲線により末広がり、楕円、十字形などいくつかの決まったパターンを識別できる(図11)。ここでは、鳥文、末広渦巻文、十字渦巻文、有翼文、充填渦巻文などにわけることができる。異なった魚皮衣資料間にも極めて類似した文様が使われていたり、類似した文様パターンの組み合わせが見られたりする。これは、作り手の間に共通の文様パターン認識が存在したことを伺わせるもので、魚皮衣の製作が極めて近い集団の中で作られたことを示すものと考えられ、いわゆるナナイ族が最も優れた製作者であったという言い伝えを裏付けるものであろう。また、これらの文様は、全体として清朝の女子服に見られるような鳳凰、蝶、福を表すコウモリ、まれには龍などの動物や牡丹などの花などを意匠化したものや喜や寿の文字を文様化したモチーフをさらに民族伝統の中で消化した結果生み出されたものであると考えられる。例えば、末広渦巻文については、中国で用いられたオスメスの鳳凰が向きあう形を意匠化した文様に酷似している(図13 Eberhard)。エベルハルトの説明によれば、女性(皇后)を表す鳳凰文は婚礼衣装に付けられたものであり、男性(皇帝)を象徴する龍と組み合わせられた魚皮衣の文様は、まことにハレの衣装にふさわしいことになる。したがって、製作者は文様の象徴性や意味も理解していたこと理解される(Eberhard 1986, 234-236)。

b. 魚皮衣の分類(図12-15)

魚皮衣を形式分類する試みは、これまでなされていない。ラウファーが背面文様部の配置から、2段もしくは3段にわかれると指摘はしているが(laufer 1902:68)、この属性によって分類はしていない。ここでは、中心部の文様の上下に見られる横方向に伸びる曲線文様により以下の4つのタイプに分類した。先述のようにイワノフの紹介した図3-bが魚皮の穴を文様で塞いだ施文方法で、素朴で古いタイプの可能性がある。その場合区画線で区分するものは、より新しいということになる。

Type A: 中心の大文様の上にほぼ横方向に連続する先により上下二段に区画される。

Type B: 中心の大文様から斜めに伸びる竜頭により上下三段に区画される。

Type C: 中心文様の上下にほぼ横方向に伸びる線とそれに

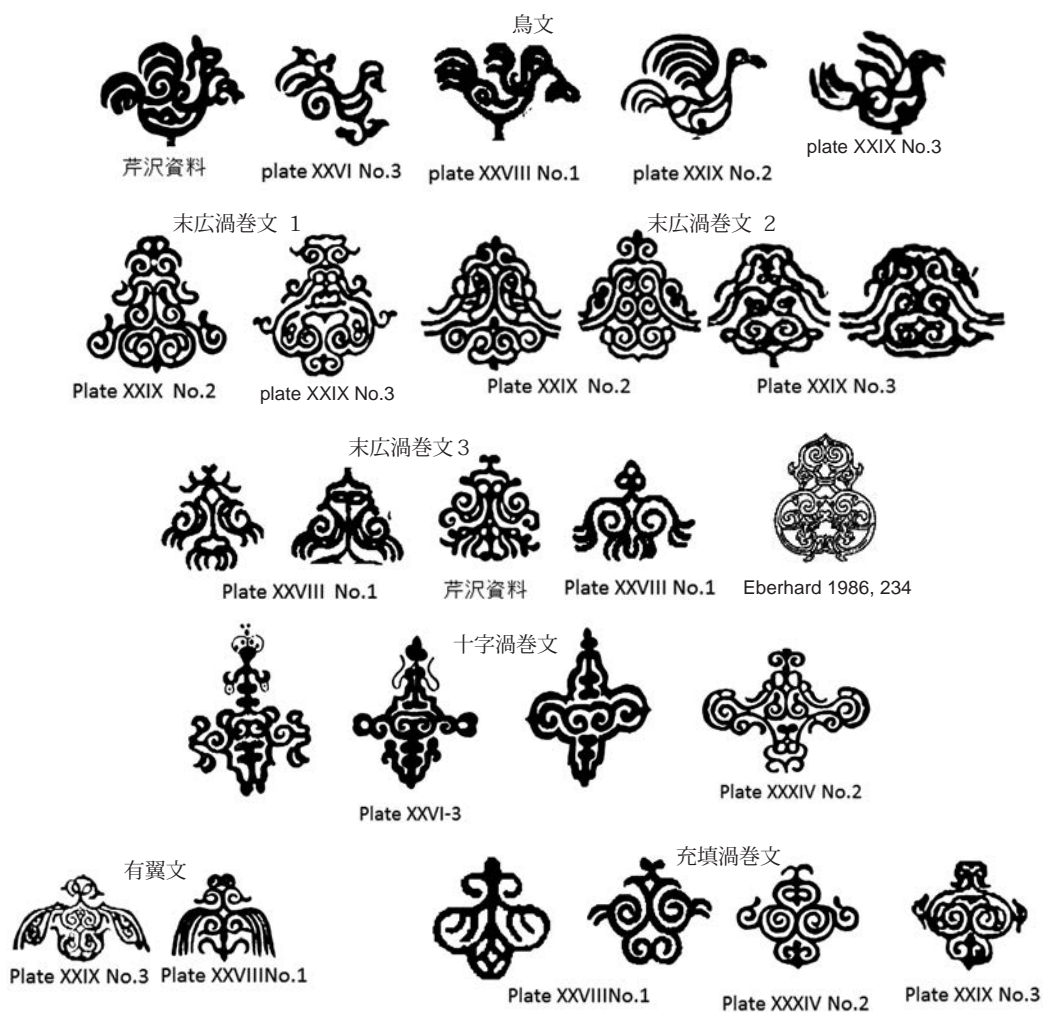


図11 主な文様の種類

Plate 番号は Laufer 1902 より

Fig.11 Major decoration motifs. Plate numbers correspond with the Laufer 1902 report.

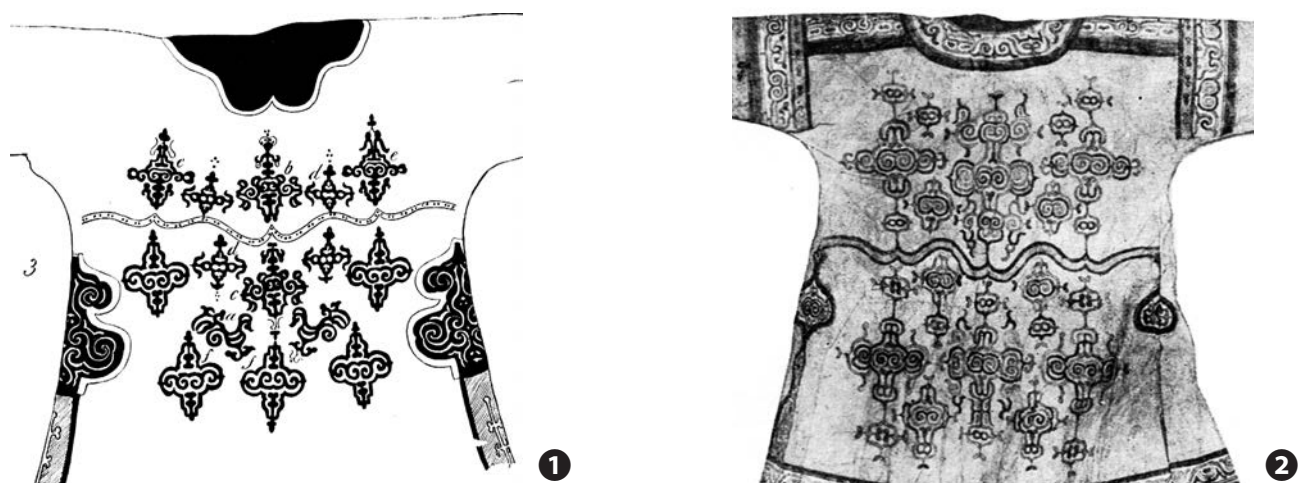


図12 タイプ A のハラート (以下の資料はすべてナナイ族)

①ラウファー 1902 PlateXXVI-No.3 (ニューヨーク自然史博物館蔵)、②イワノフ 1963: 417 fig287

Fig.12 Khalats (Garments), Type A: The following types are all from the Nanai.

① Laufer 1902; American Museum of Natural History, New York. ② Ivanov 1963

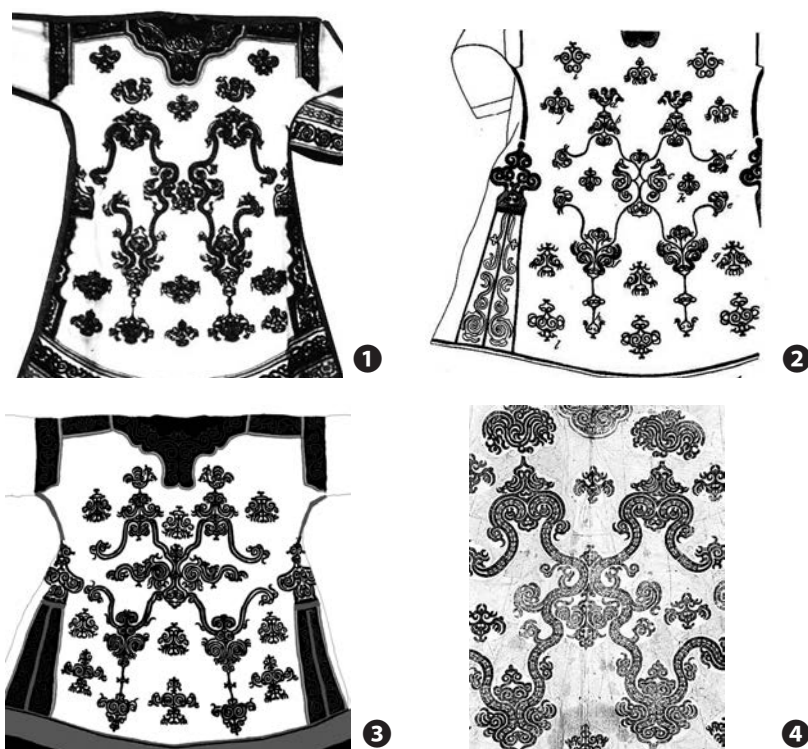


図13 タイプBのハラート

①科学アカデミー極東支部歴史学・考古学・民俗学研究所博物館蔵、②ラウファー 1902 図版 XXVIII の No.1 ニューヨーク自然史博物館蔵
③芹沢資料、④オルチャ魚皮衣(ノボシビルスク、オクラードニコフ 1981 no.50)

Fig.13 Khalats (Garments) , Type B

① Institute of History, Ethnography and Archaeology, the Far East branch of Russian Academy of Science ② Laufer 1902
③ Serizawa Art Museum ④ Institute of Archaeology and Ethnography, Siberian branch of Russian Academy of Science

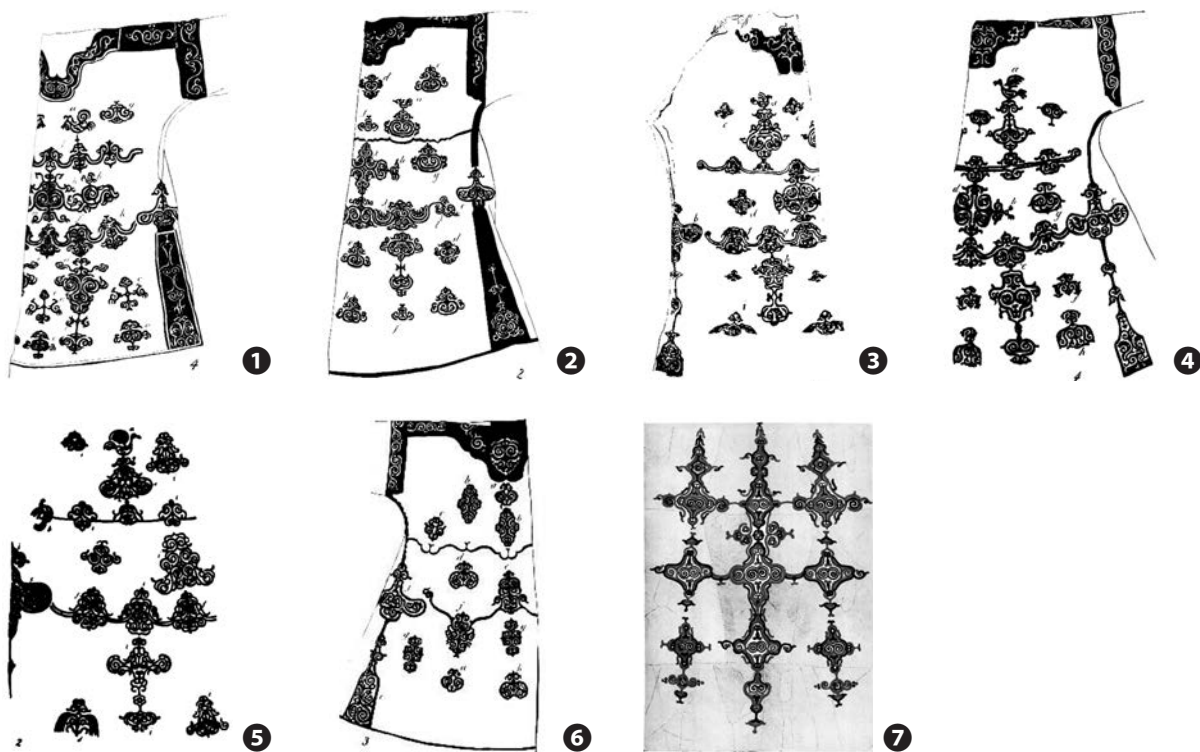


図14 タイプCのハラート

① plate XXIX-4、② plate XXX-2、③ plate XXX-3、④ plate XXX-4、⑤ plate XXIX-2、⑥ plate XXX-3、⑦ plate XXXIII、
すべて Laufer 1902 より

Fig.14 Khalats (Garments) , Type C

All from Laufer 1902



図15 タイプDのハラート
① Smolyak 1984; fig.14-5b ② Laufer 1902 plate XXX
Fig.15 Khalats (Garments) , Type D

連なる文様により上下三段に区画される。

Type D: Type C と同構成の区画の下部にさらにもう一本の曲線と文様により区画され、合計で4段となる。

Type A には、①ラウファールの図版 XXVI-3 と②イワノフの図287が相当する。①はヘラジカ皮製で、背面の上部の文様は、青、赤、黄色で直接描かれており、下部に魚皮のアプリケが施される。中心文様のやや上にカッコ文上の曲線により区画される。中心文様の下には鳥(鳳凰)が描かれている。②は、魚皮製ハラートで手書きで描かれている。①と同様の区画線の上に渦巻文による吉祥紋のシンボル、大が6個、小が6個、最小が13個描かれる。動物文はない。

Type B の①は、布製で製作年代は新しい。文様は、アプリケで描かれる。中心文様から上下に斜行する龍の首が伸び、その間に抽象的な渦巻文がありさらに句碑が伸びて末端は龍頭となる。最上部は、鳥(鳳凰)と抽象的渦巻文が3個、最下部には渦巻文が8個施されている。②は絹製で文様は刺繍されている。中心文様は相対する鳥(鳳凰)が描かれる。上部には、鳥を中心とした文様部、下部には様々な渦巻文用が展開する。③は、芹沢資料である。中心文様である鳳凰文が際立っている。上下の文様部は、②に近いが、②最上部の文様を欠く。④は、オクラードニコフ1981所載の魚皮衣で、アプリケにより美しく施文されている。中心文様は龍頭状の渦巻文で、上部文様には鳥(鳳凰)が見られる。

Type C の①の中心文様は、渦巻状の吉祥紋を挟んで上部には波上の曲線と鳥、下部には波上の曲線により渦巻状の複合文様が横に連なる。最下層には、顔状の渦巻文を中心とした少文様が配置されている。②も中心文様を挟んで上下に曲

線があり、上部には鳥の乗る渦巻文複数か、株には、曲線により横に連なる渦巻文とその下に複数の単独渦巻文が配置されている。③も中心文様の上下に曲線で区画され、その上にも渦巻文が配置され、下には、顔状の渦巻文が見られ、最下部に鳥もしくは蝶のような羽を持つ文様が単独で現れる。④は③に類似した文様構成である。⑤は、中心文様が左右対称ではなく、中心右側に複雑で大きな下に広い渦巻文が施される。区画曲線の上には中心上部に鳥が位置する。最下部も左右対称ではなく、左に羽を広げた鳥もしくは蝶が、右には中心文様の小型のものが見られる。⑥は縦長の中心文様の上と下に区画先が入る。上には楕円形の渦巻文がつき、下には縦長だが角ばった渦巻文が見られる。⑦は、魚皮製で、青、赤、黄の三色で文様が描かれている。中心文様は吉祥紋の渦巻文

で、いわゆる顔面状の表現が見られ、鳥(鳳凰)文など動物文様はない。中心文様とその上部で、横に手をつなぐ用に先が伸び、下部も線はないものの類似の文様が展開し三段となる。

Type D の①はスマリヤークが紹介した魚皮衣だが、中心文様の上下と最下段にも横方向の文様の伸びが見られる。中心文様の両側には鳥が付き、最上部にも鳥が乗る。その他の渦巻文は、非常に入り組み、かつ連続している。②は、最下段に渦巻文用の間を斜行する曲線で結ばれているという特徴がある。中心文様は、Type B の②に類似し、中心のダイヤ形を通る十字の両側に鳥が配置される。最下段には、羽を持つ蝶もしくは鳥が付けられる。

今のところ、Type A が最もシンプルなので古い段階に置かれ、Type D が複雑さの観点から最も新しいタイプと考えたい。B と C は、いずれも複雑な文様構成を持つので、大きな時間差はないものとする。

c. 佩綬様文様帯の分類

魚皮衣の両側垂下する文様帯は、本来は、中国の服飾史で言われる北方諸民族の鞬鞞^{xxi}(沈 1988; 257) や宋などの宮女のつけた玉環綬(沈 1988; 318) に由来すると考えられる。イワノフは、この両側の文様についてモンゴルなどの衣服に見られる両脇のスリットの装飾であると説明した(Ivanov 1963: 414-415)。より直接的には前述のように中国の宮女の腰佩(佩綬)(沈 1988; 465, Vollmer 2002) などに関連した装飾がある。清朝になると、腰佩は、清朝女子服の褙衣の側面に見られるスリットを飾る雲型から下垂した両側辺の文様になる(王、周 2008)。これが魚皮衣の側



図16 佩綬様文様帯の分類
 Type I ①～⑤, Type II ⑥～⑧ (①～④, ⑥～⑧ Laufer 1902,
 ⑤ Tilke 1956; plate 96-9,
 ⑨ 沈 Shen1988から。左図142西夏 Left, West Xia,
 右図198清、雍正帝の時代, Right, Qing dynasty, the emperor
 Yongzheng)
 Fig.16 Classification of ceremonial side-decorations.

面装飾に取り入れられたとする説明が最も妥当と考えられる。魚皮衣に見られる佩綬様の側面垂下文様帯の様式には二種あり、上部にクローバー上の部分があり、その下に幅を持った帯として文様帯が垂下するタイプⅠとクローバー上の部分から細く紐状に垂下しその間に2から3箇所膨らんだ文様部がつくタイプⅡである(図16)。中国の絵画などに見られるタイプⅠの例としては、「西夏敦煌壁画男女進香人」に描かれた女性の衣服(16-⑨左)や清朝の貴族女子である「紫色暗紋綱大鑲辺女髻衣」に見られ(図10-b)、タイプⅡに類似する例としては、清朝雍正帝時代の皇妃の便服飾図中に腰から垂下した紐状佩綬の途中3箇所が結び文となっている資料がある(図16-⑨右)。全体的に見ると清朝後期のものとみられる図10-a, bよりも魚皮衣の佩綬様文様帯は、一層古い時期の様相を残している可能性がある。

6 芹沢資料魚皮衣の背景と意義

①イワノフの魚皮衣アップリケ技法の発展段階(Ivanov 1963:)やその中で紹介された19世紀中頃以前のミッドランド資料(図3-a)を見ると背面の文様構成では、文様ではない円形などのアップリケや文様があってもシンプルなアッ

プリケで飾られ、区画線で分けられていない資料がより古いと考えられる。つまり魚皮の穴を塞ぐ意味で始まったアップリケが徐々に文様部としての独立性を高めていき、次第に複雑・華麗になったと考えることができる。この仮説から資料を編年すると、文様構成の段が少ないタイプAが最も古く、タイプDが最も新しいという仮説が成り立つ。今回取り扱った芹沢資料は、タイプBに属する。ただ、これらの文様構成の違いは、製作された地域や集団の違いも反映している可能性があるため、それぞれの魚皮衣の生産地が明らかになって比較するまでは、一つの仮説として今は提示しておきたい。

②芹沢資料の文様は、TypeBの他の資料と比較すると、斜めに下垂・上昇する線は、新しくなるほど、明らかに龍の首や頭を表している事がわかる(図10)。これらの首や頭を示す曲線は、すべて中心文様の鳳凰から伸びており、真ん中に目を引きつける役割をする。前述のように、魚皮衣に見られる文様についてラウファーは、その中にニワトリや魚などを見出し、重視したが、単独で現れることの多い鳥(鳳凰)を除けば、複合文様の一部を構成する単位としてのみ出現するので、本当に重要なのは文様単位が合わさった集合体としての複合文様であろう。何故ならば、イワノフが挙げた図3-a, bでは、前述のように具象的な鳥文などはなく、単純な図形や吉祥紋的な文様パターンのアップリケだけで飾られていたからである。したがって、末広がり三角、楕円図形などの複合文様も、全体として女性(皇后)を表す鳳凰や男性(皇帝)を象徴する龍の頭部などの吉祥紋文様を表したり、寿字やコウモリの文様の表現に類似していたりすると解釈できる(図9,11,12-15)(李、山村 2009)。アムール流域を中心とした諸民族は、鳥、魚、シカなどの意匠と渦巻文、唐草文の部品を用いつつ一つのまとまりとしてシンボリックな吉祥文として独自の文様にまで昇華させたのである。

③前身頃と背面の襟や肩と側面の佩綬様文様帯に施された朱彩点状文様は、左右対称に渦巻きの内部や側に施されており、藍色の中に鮮やかな彩りを添えている(口絵2)。このような文様技法に関する事例は、これまでも殆ど無いが、この地域の文様技法の特徴的な一つである。今後類例を増加させたい。

④側面に垂下する佩綬様文様帯(図16)は、中国の女性、特に貴族の衣服の形式に類似し、アムール諸族の女性の衣服が中国からの強い影響を受けていたことを如実に示す特徴である。大本は、北方諸民族の鞬轆と考えられるので、清朝の満州族も含めてツングースの諸族が取り入れた衣服の形式である可能性も高い。

⑤芹沢資料は、前述のようにナナイ族の女子の婚礼衣装と考えられ、裾に金属の飾りが付けられていた。これか、アムー

ルの交易ルートを通じて樺太のニブフに伝えられたものであるが、シャーマンの衣服として金属製の飾りが取り付けられていたという芹沢の記憶に基づけば、伝来の過程で背面に金具などを取り付けてシャーマンの衣服に作り替えられたことになる。この魚皮衣の製作年代については、1914(大正3)年頃に当時の樺太で採取された可能性があるのも、それ以前ということになる。背面文様の華麗な展開から見て、最盛期のものであり、19世紀の半ば頃の製作かと推定される。

⑥芹沢資料に代表されるアムール下流からサハリンの背中に文様帯が展開する華麗な魚皮衣は、この地域の女子の晴れ着、特に婚礼衣装である。その外形は清の宮女の晴れ着と共通する形式を持ち、また、背中一面に民族的伝統と中国の影響にもとづく吉祥文様に彩られた衣装は、まさにハレの場にふさわしい衣服であり、現在残っている当該地域の魚皮衣の中で、最も華麗で代表的な資料であることは疑いない。

謝辞

本資料は、芹沢長介先生が生前とても大切にしておられた。先生は、『アイヌ文化展』の図録のなかでこの資料を発見して購入した経緯や学問的意義について、実に精細に解説しておられる。筆者の今回の小論がその先生の緻密な研究にいささかも付け加えることができたとすれば、これ以上の喜びはない。改めて芹沢先生の深い学識と学恩を感じた次第である。本小論をまとめるにあたり、芹沢恵子氏には、快く資料の使用をお許しいただいた。また、静岡市立芹沢銈介美術館学芸員の白鳥誠一郎氏には、資料調査の際、一方ならぬご便宜をはかっていただいた。記して感謝申し上げたい。なお、英語サマリーとキャプションについては、本学のケネス・シュミット先生にご校閲頂いた。

引用・参考文献

邦文

- 五十嵐芳子 2009「ユーロアジア世界を横断する「生命デザイン」Ⅱ、魚皮衣・姿神 - 赫哲族とアイヌの表象素描」、多摩美術大学研究紀要 第24号 201-211
- 石田収蔵 1908「南部樺太に於ける土人」、東京人類学会雑誌 第270号 438-446
- 板橋区立郷土資料館編 2000『石田収蔵、謎の人類学者の生涯と板橋』
- 犬飼哲夫 1955「アイヌの鮭漁に於ける祭事」、北方文化研究報告 九号。(1996日本民俗文化資料集成19、『鮭・鱒の民俗』13-21)
- 大塚和義編 1993『アイヌモシリ 民族文様から見たアイヌの世界』、国立民族学博物館
- 大塚和義 2003「アムール川流域先住民の魚皮衣」、大塚和義編『北太平洋先住民交易と工芸』 128-133、思文閣出版
- オクラードニコフ、A.P. 著、加藤九祚、加藤晋平訳 1974『シベリア古代文化』、講談社

- 萩原真子、古原敏弘 2011「アイヌの魚皮衣ーロシアの博物館所蔵のアイヌコレクションについて1」、北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要(17)、91-122
- 加藤九祚 1986『北東アジア民族学史の研究』、恒文社
- 周燕麗、片野孝志 1991『中国文様事典』、河出書房新社
- 杉山寿栄男編著 1926『アイヌ文様』、工芸美術研究所。1992復刻、北海道出版企画センター。
- 佐々木史郎 1991「アムール川下流域とサハリンにおける文化類型と文化領域ーレーヴィン、チェボクサロフの「経済・文化類型」と「歴史・民族誌的領域」の再検討ー」、国立民族学博物館研究報告 16巻2号、261-310
- 佐々木史郎 1996『北方から来た交易民、絹と毛皮のサンタン人』、NHK ブックス772
- 佐々木史郎 1998「18、19世紀におけるアムール川下流域の住民の交易活動」の再検討ー」、国立民族学博物館研究報告 22巻4号、683-698
- 更科源蔵、更科光 1976「コタン生物記ーサケ・マス」、『コタン生物記Ⅱ野獣・海獣・魚族篇』、法政大学出版局(1996 日本民俗文化資料集成19、『鮭・鱒の民俗』48-60)。
- 芹沢長介 1990『アイヌ文化展』、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館
- 鳥居龍蔵 1926『東洋人種学叢書第壹編 極東民族』、文化生活研究會版
- 橋本康子 1999「魚皮衣の形態についてーギリヤーク族の資料を中心にー」、日本服飾学会誌(18)、28-35
- 橋本康子 2005「魚皮衣にみる装飾方法について3」、大阪人間科学大学紀要(4)、135-141
- 間宮林蔵述、村上貞助編 1811(文化8年)『北蝦夷分界余話』、九州大学デジタルアーカイブ、<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/hokui/hokui/index.html>
- 間宮倫宗 1979『北蝦夷図説』、名著刊行会(原著 安政乙卯(二年、1856年)播磨屋勝五郎刊行)
- 間宮林蔵述、村上貞助編(洞富雄、谷澤尚一編注) 1988『東韃地方紀行』、東洋文庫484、平凡社
- 村上貞助謹誌／伊勢秦穂丸撰／常陸間宮倫宗増補 1990『蝦夷生計図説』北海道出版企画センター
- 李祖定編、山村敏江訳注 2009『中国伝統吉祥図案』、説話社
- 劉大為編絵 1999『龍と鳳凰図案集』、MPC
- ローン、タチヤーナ、P. (井上紘一訳) 2009「アムール流域とサハリンにおけるジェサップ調査(1898-1899)」、国立民族学博物館調査報告82、253-288

外国文

- American Museum of Natural History 2013 "Jesup North Pacific Expedition (1897-1902)" http://anthro.amnh.org/jesup_collection
- Atkinson, T.W. 1860 "Travels in the Regions of the Upper and Lower Amoor and the Russian Acquisitions on the Confines of India and China" Hurst and Blackett, Publishers, London.
- Collins, P. M. 1862 "SIBERIAN JOURNEY DOWN THE AMUR TO THE PACIFIC, 1856-1857", The University of Wisconsin press, Madison.
- Деревянко, Е. И. ответственный редактор 2005 "Нанайцы, Каталог коллекции музея истории и культуры народов Сибири и Дальнего Востока института археологии и этнографии СОРАН", Новосибирск. Derevianko, E.I., ed., 2005 "Nanai, Collection catalogue of the museum of history and culture of the people of Siberia and Far East, Institute of Archaeology and Ethnography SORAN, Novosibirsk.
- Eberhard 1986 "A Dictionary of Chinese Symbols, Hidden Symbols in Chinese Life and Thought", first published in

- German as "Lexikon chinischer Symbole" in 1983. Routledge & Kegan Paul, New York.
- *Fitzhugh, W.W., Dubreuil, C.O. eds.*, 1999 "Ainu Spirit of a Northern People", Arctic Studies Center National Museum of Natural History in association with University of Washington Press.
 - *Глузовский, В. Е.* 1917 "Приморско - Амурская окраина и северная Маньчжурия", 2-е исправленное и дополненное издания. Gluzovskii, V.E. "Maritime-Amur far end and Northern Manchuria" Vladivostok.
 - *Звиденная, О. О., и Новикова, Н. И.* 2010 "Удэгейцы: охотники и собиратели реки Бикин, (Этнологическая экспертиза 2010 года)", Российская академия наук Институт этнологии и антропологии ООО «Этноконсалтинг» Москва, 2010 Zvedennaya, O.O. and Novikova, N.I. "Udeghe: hunters and gatherers of the Bikin river", Russian Academy of Science, Institute of Ethnology and Anthropology.
 - *Глебова, Е.* 2010 "Метаморфозы рыбьей кожи, путь древнего ремесла народов Амура" (Fish skin metamorphoses), Омега Пресс, Хабаровск.
Grebova, E. 2012 "Fish skin metamorphoses, way of the ancient work by the people of Amur" Omega press, Khabarovsk.
 - *Иванов, С. В.* 1963 "Орнамент народов Сибири как исторический источник", издательство академии наук СССР, Москва, Ленинград.
Ivanov, S.V. 1963 "Ornament of the Siberian tribes as historical material" Publishing of Academy of Science SSSR, Moscow, Leningrad.
 - *Ивашенко, Л. Я., Киле, Н. Б., Смоляк, А. В., Старцев, А. Ф. и др.* 1994 "История и Культура Ульчей в XVII-XX вв.: Историко-Этнические Очерки", Санкт-Петербург Наука. *Ivashenko, L.Ya., Kile, N.B., Smolyak, A.V., Startsev, A.F. et al.*, 1994 "History and culture of Ul'chi in 17-20 century: Historical-Ethnological reports" Sankt-Peterburg, Nauka.
 - *Кочешков, Н. В.* 1989 "Этнические традиции в декоративном искусстве народов Крайнего Северо-Востока СССР", Академия Наук СССР, Ленинград Наука.
Kocheshkov, N.V. 1989 "Ethnical Traditions in the Decorative Arts of the Farthest North-Eastern People of USSR", Science Academy of the USSR, Leningrad Nauka.
 - *Кочешков, Н. В.* 1995 "Декоративное искусство народов Нижнего Амура и Сахалина XIX-XX вв. Проблемы этнических традиций" Санкт-Петербург "Наука". *Kocheshkov, N.V.*, 1995 "Decorative Arts of the People in the Lower Amur and Sakhalin in XIX-XX centuries" Sankt Peterburg, Nauka.
 - *Ларин, В. Л., Тураев, В. А., Березницкий, С. В., редакторы.* 2008 "История и Культура Нивхов; историко-этнографические очерки", Российская Академия Наук, Санкт-Петербург Наука. *Larin, V.L., Turaev, V.A., and Bereznitskii, S.V.* 2008 "History and Culture of the Nivkh; Historical-Ethnical Reports" Russian Academy of Science, Saint-Petersburg Nauka.
 - *Laufer, B.* 1900 "Preliminary Notes on Explorations among the Amoor Tribes", American Anthropologist, New Series, Vol.2, No.2 297-338.
 - *Laufer, B.* 1902 "The Decorative Art of the Amur Tribe", Memoirs of the American Museum of Natural History, Volume VII, Publications of the JESUP North Pacific Expedition.
 - *Levin, M.G., and Potapov, L.P. eds.* 1964 "The People of Siberia", The University of Chicago Press. Chicago and London.
 - *Мезенцева С. В.* 2005 "Погремушки из рыбьей кожи. Секреты изготовления нанайских музыкальных инструментов // Словесница искусств". – Хабаровск, 2005. № 16.– С. 68-70.
 - *Levin, M.G., and Potapov, L.P.* 1964 "The Peoples of Siberia", The University of Chicago Press. Chicago and London.
 - *Oakes, J., and Riewe, R.* 1998 "Spirit of Siberia, traditional native life, clothing, and footwear", Douglas and McIntyre, Vancouver and Toronto.
 - *Okladnikov, A.P.* 1981 "Ancient Art of the Amur Region", Aurora Art Publishers, Leningrad.
 - *Омский Областной Музей изобразительных искусств имени М. А. Врубеля* 2008 "Омская сэннамция, Серия акварелей Безана Хирасава «Жизнь и обычаи айнов» из собрания Омского областного музея изобразительных искусств имени М. А. Врубеля", Издательная Программа «Интероса»,
Omsk museum of painting arts after M.A. Vrubel 2008 "Omck Sensation", Series of Watercolor Paintings by Byozan Hirasawa on the "Life and customs of the Ainu" from the collection of Omsk museum of painting arts after M.A. Vrubel"
 - *Shen Congwen* 1988 "Zhongguo Gudai Fushi Yanjiu", "Ancient Chinese Costume", Nantian Shuju Publishing Company, Taipei., 沈從文 編著 1988『中國古代服飾研究』, 南天書局有限公司, 台北.
 - *Смоляк, А. В.* 1984 "Традиционное хозяйство и материальная культура народов нижнего Амура и Сахалина", издательство наука, Москва. *Smolyak, A.V.* "Traditional Economy and Material Culture of the People of Lower Amur and Sakhalin" Nauka, Moskva.
 - *Смоляк, А. В.* 1994 "Нанайцы", "Народы России, Энциклопедия" 239-242. Научное Издательство Большая Российская Энциклопедия, Москва. *Smolyak, A.V.* "Nanai", "People of Russia, Encyclopedia" 239-242, Moskva.
 - *Смоляк, А. В.* 2001 "Народы Нижнего Амура и Сахалина, Фотоальбом", Наука, Москва. *Smolyak, A.V.*, "People of the Lower Amur and Sakhalin, Photo Album", Nauka, Moscow
 - *Song Zhao Lin, Gao Ke and others eds.*, 2004 "Zhongguo Minzu Minsu Wenwu Cidian", "Dictionary for Ethnological and Folklore Material Data of China", Shanxi People's Publishing Company. 宋兆麟、高可 他編 2004『中國民族民俗文物辭典』, 山西人民出版社
 - *Шренк, Л. И.* 1899 "Об инородцах Амурского края, Том Второй, Этнографическая часть, первая половина: главные условия и явления внешнего быта" Санкт-Петербург. скаченный из Третий <http://www.evenkitek.ru/books/ethnography/shrenk-ob-inorodtsah-amurskogo-kraya/index.html>
 - *Шренк, Л. И.* 1903 "Об инородцах Амурского края, Том Третий, Этнографическая часть, вторая половина: основные черты семейной, общественной и внутренней жизни гиляков, кольдов, ольчей" Академия фундаментальных исследований. Москва. *Shrenck, L.I.*, "On the Aborigines of Amur region, Vol. 3 Ethnographical section" Academy of the fundamental research, URSS Moscow.
 - *Старцев, А. Ф.* 1996 "Материальная Культура Удэгейцев", Институт истории, археологии и этнографии народов Дальнего Востока ДВОРАН, Владивосток. *Startsev, A.F.*, "Material Culture of the Udeghe", Institute of History, Archaeology, and Ethnography of the People of the Far East DVORAN., Vladivostok
 - *Tilke, M.*, 1956 "Costume Patterns and Designs, A Survey of Costume Patterns and Designs of All Periods and Nations from Antiquity to Modern Times" Lodon, A.Zwemmer LTD.

- Тураев, В. А., редактор 2001 “История и Культура Орочей; Историко - Этнические Очерки”, Санкт - Петербург Наука. Turaev, V.A., “History and Culture of the Orochi”, Saint-Petersburg Nauka.
- Тураев, В. А., редактор 2008 “История и Культура Нивхов; Историко - Этниогрфические Очерки”, Санкт - Петербург Наука. Turaev, V.A., “History and Culture of the Nibkh”, Saint-Petersburg Nauka.
- Vollmer, J.E. 2002 “Ruling from the Dragon Throne, Costume of the Qing Dynasty”, Ten Speed Press, Berkley.
- Wang Jin Hua, Zhou Jia 2008 “Tushuo Qingdai Nuzi Fushi”, “Illustrated lady's dress of the Qing Dynasty”, Zhongguo Qinggongye publishing company. Beijing. 王 金华、周 佳 2008 『图说清代女子服饰』、中国轻工业出版社、北京
- Zhang Min Jie, Wang Yi Zheng 2005 “Yujia Jueji - Hezhezu Yupi Zhizuo Jiyi”, “Manufacturing skills of fish skin products of Hezhe people” Heilongjiang People's Publishing Company, Harbin. 张敏杰、王益章 2005『鱼家绝技 - 赫哲族鱼皮制作技艺』、黑龙江人民出版社、哈尔滨。
- Zhou Xun, and Gao Chun Ming 1988 “Zhonghua Fushi Wushiannian”, “Five thousand years of Chinese costume”, Art book publishing company, Taipei. 周洵、高春明 1988『中華服飾五千年』、美工圖書社、台北。
- Zhou Xun, and Gao Chun Ming 1995 “Zhongguo Gudai Fushi Daguan”, “A Guide to Chinese Ancient Costume”, Chongqing publishing company., 周洵、高春明 1995『中国古代服飾大观』、重庆出版社
- Zhuan Heng et.al. eds. 2008 “Huang qing zhi gong tu”, Guang ling publishing company., 传 恒等撰『皇清职贡图』(乾隆十六年、1751) 广陵书社
- Yu Xiao Fei and Huang Ren Yuan 2002 “Hezhezu yu Ayinu Wenhua Bijiao Yanjiu”, “Comparative Studies of Culture of Hezhen people and AINU people”, Heilongjiang People's Publishing Company, Harbin. 於 晓飛、黄 任遠「赫哲族与阿伊努文化比較研究」、黑龙江人民出版社、哈尔滨(ハルビン)。

註

- i 板橋区立郷土資料館の特別展『石田収蔵、謎の人類学者の生涯と板橋』2000の展示解説には、オロッコではなくニブフ(ヒ)であると記されている。「シスカ周辺での購入品と考えられている。内外土俗品圖集編集過程での写真の裏には「マシチュ(魚皮)ウスクリル」と鉛筆の裏書きがある。ナナイ民族は大陸のアムール川流域にその生活基盤がある。この魚皮衣はシスカのニブフの手にわたり、石田が入手したものであろう。大正3年(1914)頃、シスカ(敷香)の吉岡依平の書簡・葉書には、魚皮衣の入手についての石田宛の往信があり、ニブフのプニオンこと桃太郎が、「ロモー」のニブフが昔時の魚皮衣を持っていて、代金50円であると伝えている。この魚皮衣が、写真の資料に該当するかは不明である。」との記載がある(板橋区立郷土資料館2000:34-35)。石田収蔵は、1879年(明治12年)に秋田県鹿角郡柴平村字柴内230(現在の鹿角市十和田毛馬内)に生まれ、東京大学理学部に入学生、坪井正五郎の知遇を得た。1940年没。
- ii Atkinson は、アムール流域の旅行記の中で Mangoon 族(ウリチ族)が窓に魚皮を用いていると記している(Atkinson 1860:486)。
- iii 岩手県宮古市では、さまざまな鮭皮製品を特産品として売出している。
- iv 筆者は韓国で作られた魚皮製の釣り用手袋製品を所有している。
- v いわゆるコート状の綿襖甲を意味しているのであろう。

- vi ロシア、オムスク絵画芸術博物館では、同館所蔵の平沢屏山のアイヌ絵コレクションを“Омская Сэнсаци”として2008年刊行した。巻末の参考資料にロシア民族学博物館所蔵のサハリンアイヌの子どもたちの写真が載せられているが、ニブヒに見られたと同様の前ボタンの服を着た子供たちが写っている。(Омский Областной Музей 2008, p.87右下写真)。子どもたちは、右衽の着物風の衣服と前ボタンの服の二種類を着ている。林蔵の時代からほぼ百年後も同じような衣服がサハリンで用いられていることに注目したい。
- vii この証拠としてラウファーは、中国に近い民族ほど芸術性が高くなり、逆の場合は、より美しさがなくなるという見解を述べている(Laufer 前掲 p.7)。中でも中国から遠いギリヤーク(ニブヒ)の芸術は貧弱で未発達だと断じた。
- viii 例えば両脇の下垂する带状の文様帯についてみると、ラウファーは、その上部にニワトリのモチーフを見出すが、明らかに清朝の女性の衣服にも見られる文様帯の雲形を模倣していることがわかる。
- ix いわゆるアイウシ文である。
- x 形態や作り方が縄文貝塚から出土する骨篋に酷似する。素材は、シカの中手骨を乾燥した後、横から縦長に半割し、両側の壁状になった部分を取り去るために石器を加工するように打撃で剥離し、さらに研磨により平滑にして板状にする。この平たい板状の素材を用いて骨篋が作られる。さらにこの板状の半製品を中央かたら半割すれば骨製の棒状の骨器、例えば骨針、鈎、尖頭器などを作ることができる。ナナイなどの使用例を参考にすれば、縄文の骨篋も内水面に面した遺跡では、魚皮剥ぎに使用された可能性がある。ただ、海棲の魚類(内水面で取られたサケ類を除く)の魚皮利用例については筆者は承知していない。
- xi 1988年8月、筆者はアムール河のガーシャ遺跡でサカチ・アリヤン村のナナイ族の老婦人がナマズの皮を剥ぐのを見つけた。
- xii 赫哲族は、魚皮の脂肪をとる際、鮭のハラコを魚皮の内面に塗りつけ、放置して発酵した後、白土を塗ってからかき落とすという方法を使用していた。これが古い方法であろう(Zhang and Wang 2005:19)。
- xiii 佐々木やローン(2009)によれば、かつてサハリンではニブヒ族を中心とする山丹交易が広く行われていて、ニブヒの商人が直接顧客の村を訪れたり(佐々木 1998:685)、多数の民族が住む特定の場所に市を開いたりする場合もある(Laufer 1900:、ローン2009:268)。例えば、ナナイ族の魚皮製晴れ着は、アムールのタルゴン村で製作されたものが、アムール河口からサハリンまでの諸民族に愛用されていた(Smoljak 1984:159)。
- xiv 中国の文様では、龍と鳳凰は同時に現れることがある(周、片野 1991)。
- xv 犬の皮が使われていた(Song et al 2004:16)。
- xvi しかし、ウラジオストク研究所所蔵資料など19世紀末以降の資料では、切伏の基盤は着色されていないものが多い。
- xvii 図のナナイ族のシャーマンの服には鏡などが多く吊り下げられているので、芹沢資料も入手時にはそのようであった可能性もある。
- xviii 芹沢長介先生は、生前、静岡市立芹沢鉦介美術館の白鳥学芸員に別のものではないかとの考えを示されていたという。
- xix 中国からの影響を重視する場合には、この鳥も含めて鳳凰の可能性が高い。地域的な伝統を重視するとすれば水鳥であろう。いずれにしてもニワトリの可能性は薄い。
- xx 例えば王、周2008のp.79の黄色緋絲緞蝶恋花女氅衣やp.80紫色暗紋綢地鑲辺氅衣、同p.81紫綢地鑲辺氅衣に見ることができる。
- xxi 鞞は、中国古代北方少数民族民族が帯などにつける佩としての金属装飾である。更に古い時代には金属製の魚佩だった可能性もあろう(Shen Congwen 1988 沈 從文 編著 1988)。